まい　あーと
■押絵「お馬の親子」
by 小高　啓子

涼を刻む

―「たちかわ氷まつり」から―

立川北口大通りの「氷まつり」がすっかり恒例となって、今年で四回目。ますます技術も冴え、アイデアにも富んで、夏の一日、市民の目を愉しませてくれた。彫刻師も本格だが、それを支える裏方もまた本腰、いよいよ立川「夏の風物詩」の色をふかめて――。

目を見張る「宝船」の彫刻は、氷10本の力作。

光りに淡く溶け、幻想的な美しさを醸し出す氷たち。

力強く一気に彫り出していくのが氷彫刻の醍醐味。

彫る名人だけじゃない。仮装して楽しませる森田さん。

過ぎし日のわが立川（ふるさと）を今語る

9月15日は敬老の日。明治生まれの立川人をお訪ねしてみました。街の移り変りを見続けて来た方たちです。今からは想像もつかないような貴重な話が次々と。やはり人生長く積み重ねてこられた〝重味〟であります。

島田平四郎さん（一番町）

この辺りは、五日市街道を境に短冊型の土地で、畑の奥にいっているものには、ラッパで食事やらを知らせてね。魚も一軒しかない魚屋が塩ジャケや干物を天秤で持ってきた。そんな大正の初め、爺さんに刺身を食べに八王子まで連れていったもらったな。駅のホームから、家の欅が見えるほど辺りにはなにもなかった。

小川　良さん（柴崎町）

「立川駅が出来る時、改札口を北と南どちらにするか、ずい分話し合いがあったけど、結局、鉄道用の水を砂川用水から貰うんだからって北に決ったんだよね。昔、駅前は大雨が降るとよくあふれてね。女学生の頃、帰れなくて困っていたら、兵隊さんがおぶってくれた事もあった」。昭和36年、全国初の女性市議会議長に。今も席の暖まる暇がない。

井上重雄さん（富士見町）

「昔、富士見町辺りは崖下に、柴崎町辺りからは崖上に人は住んだものなんだ。崖下は湧き水が多くてね。同じ地域でも水の出方はそれぞれで、二軒隣りでは3月から11月、うちは3月から11月。でも、一年中で、夏には縁の下からも水が湧いて大変だったよ」。長年文化財保護につくされ、屋敷地を歴史民俗資料館に提供。今のおすまいは崖上、立川城支城跡。

田中タマノさん（西砂町）

よく知っているでしょうけどこの辺りは〝赤っ風〟といわれるほどに風が強くて、舞い上がった土で見えなくなる程でね。今以上に欅も太くてきれいな並木でな、夏はとっても涼しかった。

井戸からの水はとても美味しかったが、基地が来てからは水質が落ち、その為に早くから水道が引かれたよ。当時役員してたからずいぶん働き掛けたよ。

？立川クイズ

流れる水と鉄道。普通は鉄道が水の流れの上をまたいで通ります。ところが、電車の頭上を横切って疎水が悠々と流れているところが市内に一ケ所だけあるのです。まさか、とお思いの方は試しに市内の鉄道めぐりをされてみては？（ただし、水道管は別です）

①立川駅構内南北通路下
②中央線上陸橋そば（富士見五丁目—柴崎一丁目間）
③西武線玉川上水駅・武蔵砂川駅間

〔八月号の答〕②
立川で行われていた鵜飼いでは鵜匠も川に入り、鵜を操ります。その際、長良川のような衣装はつけず、半てんに股引き（ももひき）というスタイルでした。

立川駅長列伝
⑨　中野　明

昭和三五年秋——米軍家族住宅に住む子供たちが、電車見たさに線路内に立ち入り遊んでいるという情報が度々、植松駅長の耳に入った。そこで、植松駅長は運転事故防止の一環として、子供たちに列車運転の実態を見せ、線路上での置き石遊びがいかに危険であるかを知ってもらおうと考えた。

その主な内容は、先ず、中央線電車の運転室に子供たちを乗せて、進行する電車の前方を見せる。次に、八王子機関区にて機関車の見学、最後に立川駅々長室で懇談会を行うというものだった。結果は好評で、参加した子供たちから感謝され、以後、「米軍家族住宅の子供たちが線路内に立ち入って困る」という連絡を耳にしたことはなかった。

※立川駅にて、青梅線電車を使用しての記念撮影。（運転室で二人の子供と写っているのが植松駅長）

※八王子機関区での機関車見学（デッキ上）

漢字テスト32

空欄に一字挿入を試みよ。

天空●闊
春●秋実

たちかわ伝言板

「立川諏訪まつり」開催

8月27日(土)
民謡流しおどり　＊AM6：00～
万燈みこし　＊AM7：00～
おまつり広場　＊AM12：00～

8月28日(日)
山車のパレード　＊AM11：00～
ブラスバンド　＊AM11：00～
大太鼓パレード
おまつり広場　＊AM11：00～

「ふれあい紙芝居セット」貸出中

柴崎町3丁目に住む須田孝一さんの好意により、加古里子・作による紙芝居を寄付して頂きました。
「市民の多くの方に利用していただければ・・」との須田さんのことばも頂いております。＊連絡は「えくてびあん編集工房」まで。

真如苑だより

今年も後半に入りました。時間はあっという間に、過ぎてしまいますね。気持にゆとりをとり戻しに、ちょっと足をのばしてみませんか？

今月もお待ちしています。

■日時　9月16日(金)　午後2時～4時
■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。
■立川市民（成人）に限らせて頂きます。
■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

表紙は語る

今月の表紙を彩ったのは、愛雅会会員の小高啓子さんの作品「お馬の親子」であります。

会が開かれて20年、そのお祝いの記念として開催された展覧会。そこに出品された作品である。素材は、厚紙の型の上に綿をのせ、色とりどりの布で包んだもので、〝押絵〟といわれるものである。よくお正月の節で使われる羽子板の表に色どられている絵である。しかし、この押絵はそれとは異なり、絵画の絵の具を用いての手法と、最初にご説明したような厚紙で型を作り、綿をその上にのせ色とりどりの布で包んだ伝統的な手法を、バランスよく組み合わせた〝創作押絵〟である。

題材も時代に合ったものを取り入れ「新鮮なものを……」と、こころ掛けているそうだ。素材のひとつひとつが雰囲気たっぷりに作られているのでお聞きしてみると「ひとつひとつスケッチをして、それぞれが持ってる特徴をつかんだり、月一度ある研究会なんかでより よい表現方法を先生をはじめ、いろんなひとから教えてもらって勉強してますね」との返事がかえってきた。普段の、主婦としての生活のなかでも、いつも「なにかいい素材はないか、いい布地はないかな…」と、気にとめながら新しい作品の構想を考えているとか。年に2・3点作るそうだが大変な作業である。

ミス立川
―42人の乙女たち―

7月23日(土)〝グリーンふるさとまつり〟の一環として開かれた「ミス立川コンテスト」目をみはる乙女42名の中から、みごとミス立川に鈴木麻理子さん（19才）・準ミスに小沢史子さん（22才）・長谷川朋子さん（20才）が選ばれた。昨年のミス東京入賞の余韻さめやらぬ立川。鈴木さんに大きな声援を送る。

漢字テスト・答え

天空海闊（てんくうかいかつ）
天空も空も広々として大きい。度量が大きくすべてを包容する。大らかで屈託のないたとえ。

春華秋実（しゅんかしゅうじつ）
春の花と秋の果実。外面の形式と内部の実質を対比させた語。

工房から

●移り行く立川の街並を記憶している方は多いが、50年・60年前の砂川村・立川村の時代を知る人は少なく、いや知る機会すらないようであります。敬老の日などはおじいちゃん・おばあちゃんに〝古きよき立川（まち）〟を聞く絶好のチャンスでは●おじいちゃん・おばあちゃんとは、打って変って現代立川の象徴的なのが、ミス立川出場の面々。平均165㎝と全国平均（18～25才・157・87㎝）を大きく上回るほどの身長。ミス東京コンテストは是非がんばってほしいものです、ね、鈴木さん。●府立二中として明治に建てられた立川高校。当時は、見渡す限りの畑であった。今や校舎を捜すことすら難しいほど。時の流れは思っているより早いようです●今宵また星のながるるえくてびあん。

（編集）石塚敦美　小川知子　神山清子　稲川玲　田中恵子　沼上麻里　半沢正弘　原田悦子
（写真）天野武男　板橋一明　吉田義治　スタジオ269

校舎に惜別、立川高校

都立立川高校の校舎が50年の歴史を閉じる。府立二中時代からの卒業生約2万人のうち、9割の学生が学んだ校舎である。愛着を持つ人は多い。特に6階建ての塔は地元にも親しまれ子供たちは「二中の塔の見えるうちに帰って来なさい」と言われたとか。新校舎は地元に開放を考慮した設計だそうだ。

月刊えくてびあん　第50号
昭和六十三年九月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2-4-11
ファインビルディング3F
電話　〇四二五(28)〇〇八二
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　(株)大濱社

あーとさろん

9月は画家の方々にご登場いただこう。色彩に、形に、あるいは構成に、かけてきた方ばかり。でも、みなさん苦心のあとなど見せない、さりげなさが光ってます。

船水徳雄さん／日本画

▶日展会員。器用に人にあわせることなく「今どうしても」と思うものだけ描いてきた、と。（西砂町）

坂口紀良さん／油絵

◀パリ留学で画風一変。「僕の絵は共感するまで時間がかかる人が多い」。気概がにじむ。（砂川町）

杉山紀美子さん／日本画

▼日本美術院院友。「思うように表現できなくて、もどかしい」と。院展・春展入選多数。（柴崎町）

川島清子さん／油絵

▲"片手間の趣味"でなく、主婦と画家の両立を貫いてきた。「継続は力」の言葉に実感こもる。（富士見町）